カローシュティー文書第511番について (2)

岩 松 浅 夫

(承 前)[57]

B. 裏 面

この裏面も，内容的には表面と同様に仏教の僧伽について，その特徴や特長(功徳) などを説き，述べたものということになろう。ただし，前の表面の場合には僧伽——つまり，具体的には，それの構成員である比丘？——に洗浴，特に蒸気浴（または，蒸風呂。jentāka/jantāka-snātra-）を布施することの功徳を説き，それを強調するのが目的であったように見受られるのに対して，この裏面ではその僧伽に属すべき比丘のあり様が，つまり僧伽にはどのような人間＝比丘が見られ存する（べき？な）のかということが問題とされている——そこに主眼が置かれている——（らしく思われる)，ということになろう。

一方，そこでまた，そのようなことを主なテーマとするこの裏面を他の経論との関係，つまり同じ若しくは類同の内容やモチーフ等を有するもの＝経論が他に存し知られるのかという観点から見てみると，先の表面が全同ではないにしても『アヴァダーナシャタカ』との何らかの，と言うよりもある程度——かなり!?——密接な関係が認められ，それから話素も一部承けたりしているらしく考えられるのに対して，この裏面の方は，第５偈で触れられる摩訶波闍波提による仏への衣の供養というよく知られた話（伝承）を別にすれば，類似したり共通する内容のもの——伝承や話素など——は他には殆ど知られないということになろう。すなわち，その（衣供養の）伝承というのは，成道後暫くして？——初めて？　または何度目かに？——仏つまり釈尊が故郷のカピラヴァ

ストゥ (kapilavastu; Pa. kapilavatthu) に帰郷されたとき，仏（釈尊）の姨母でまた養母でもあった摩訶波闍波提（大愛道とも。mahāprajāpatī gautamī; Pa. mahāpajāpatī gotamī）が手ずから織成した「衣」(Pa. dussayuga＝dūrśa/dūṣya-yuga-)[58] を仏に献上げようとしたが，仏はそれを自分一人にではなく僧伽に布施すべきだとして受取られなかった，そのため摩訶波闍波提と仏の間に暫し遣取りがあった後，最後に侍者の阿難 (ānanda) の取りなしで事は落着した，云々というものであるが[59]，この一例を除いては，他に対応する既知の内容のもの——伝承や話素，乃至教説など——は知られないのではないか，ということである[60]。

このように，この裏面の方は，直接これに対応し乃至相当するもの——経論等——はなく，それどころか，内容上もこれ迄殆ど全く知られなかった新しいもの＝テキストであると言ってよいであろう。それはともかく，抄写本，すなわち書写されたものという観点から見た場合にも，この裏面は判読が不明—不能であったり困難とされる（された）部分が多く，つまり欠落した部分や箇所が多いということで，それだけ理解（解読・読解）や扱い——仏教梵語への還元などの——も難しいものということになろう。実際にも，先述したように，この裏面には全部で14偈記されているわけであるが，その中でも略完全に，つまり4つの詩句 (pāda) とも全てが大略完全な形で残されているのは高々第2，7，9，11，13の5偈程度で，残る9偈は程度や量に差はあるものの何らかの形や意味等で欠落部があり[61]，すなわち不完全なものということになろう。そしてまた，そのようなことのために，該カローシュティー文書の多くを，就中当のこの第511番の表面も英語訳したバローも，裏面の方については訳さずに放置——放棄？——したという次第でもあったわけである[62]。

ともあれ，こうして，内容の上からは実質的にこれ迄殆ど全く知られなかったもの（テキスト）であるということや，また残された，つまり解読＝ローマ字転写されて出版されたテキストの本文部分も大半はそれぞれの偈毎に欠落があったり断片的であったりして，したがって各偈それぞれに意味内容の把握や理解が十分には出来ず，そのために読解や和訳，仏教梵語への復原・回復等のことを行ったり試みることはそれ程容易というわけでは決してないが，しかし

全く不可能というわけでも必ずしもないように思われる（少なくとも，筆者には)。そこで，この裏面（の残された部分）に対しても，筆者の力の及ぶ範囲内でということになるが，前の表面の場合と同じようなことを試みてみることにしたい。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

ところで，その作業に取掛るために，試みにこの裏面の冒頭の，つまり最初の部分を見てみると，この面も前の表面の場合と同様に，標題や前置乃至序—導入の文——散文の!?——などはなく直接本文が，すなわち第１偈から始まるように見受られるが，それはともかく，特にこの面の場合には仰(のつけ)の第１偈の最初からかなりの部分が，具体的には冒頭の第１詩句から第３詩句迄（と第４詩句の第１字＝音迄）が失われ——判読不能で——，実際には第４詩句（の第２字）から始まっていることが知られる。それはさて置き，その第１偈の中では唯一残された第４詩句の部分を見てみると，それの文章—文言からこの第１偈は，表面の場合とは異なって，後の本文部分の言わば「序」と言うかそれを引出すためのもの，つまり導入部（文）の如きものとなっている（いた?）らしいことが知られよう。そこで，もしこの第１偈が内容的に言ってそのような，つまり後の本文部を引出すための導入文的なものであったとすれば，それの今は失われた部分を回復・復原してやる——それも，韻律（metre）の要求にもできるだけ合致し抵触しないような形で——のはそれ程困難なことではないように思われる。因みに，その第１偈の現在残された（ローマ字転写して示された）部分というのは次の如きもの—字（または，音）であるが，これを基にまたは参考にして（仏教）梵語形へと還元—復原し，また当該の今は失われた第１～３詩句の部分に関しても筆者なりに推測—想定し得られた回復形を示すことにすれば，次の如くになるであろう[63]。

……

……

……

… [sa rvi e ka ma na sa . . d]i ta [śru no tha] 1

(*pṛcchāma*#1 (#2*bhikṣu kidṛśā*#2). #3 *upalabbhi*#4 *saṃghe*
deśetu#5 *tān ca*#6 *bhagavān ya*#7 (#8*bahirdha saṃghe*#8) |
ye tādṛśāḥ ta upalabbhi#4 *na anya*#9 *saṃghe*#10
taṃ#11) sarvi#12 ekamanasā (*mu*)ditāḥ śruṇotha#13 ‖1‖

〔和　訳〕

1．(「〔世尊に〕お尋ねします，僧伽にはどのような比丘が見出されるのでしょうか（または，見出さるべきでしょうか)。また僧伽の外にある（＝僧伽にはいない）者（＝比丘）〔とはどのような者たちなのか〕，彼らについて世尊はお説き下さい。」

〔世尊は言われた〕「このような（＝次のような）者たちが僧伽には見出され（または，見出さるべきであり），他の（＝そうでない）者たちは〔見出され〕ない（であろう)。〔その者たちについて私は説こう。〕それを）汝(おんみ)らは皆心を一にし，喜悦(よろこび)〔の心をもっ〕て聴け（聴くがよい)。」

#1　＝*pṛcchāmas*, m.c. or *pṛcchāmi ?*

(#2…#2)　＝*bhikṣavaḥ kīdṛśāḥ*, m.c. or *kīdṛśa bhikhū ?* ＝*kīdṛśāḥ bhikṣavaḥ*, m.c.

#3　or *kadṛśā ?* ＝*kīdṛśās*, m.c.

#4　この語形については，see *infra* ＊9.

#5　＝*deśayatu*, m.c. or *deśayatu ?*（韻律上は，第2，3の短音2つで長音に代える所謂る hypermetric の形になっていると見れば，*deśayatu* のままでも可。)

#6　or *pi ?* ＝*api*.

#7　or *yi ?* ＝*ye*, m.c.

(#8…#8)　この語句―言表については，see, e.g., *infra* v. 2, pāda 3.

#9　or *anyi ?* ＝*anye*, m.c.

#10　or *bhāṣe ?*（もしこちらの方の回復―補いの語形を採るとすれば，後半部の訳は「(……〔世尊は言われた〕「このような者たちが〔僧伽には〕見出され，他の者たちは〔見出され〕ない（であろう)。〔その者たちについて〕私は説こう。それ

を）……」」の如くなろう。）

#11　この語形については，see *infra* ＊1.

#12　この語形については，see *infra* ＊2.

#13　この語形については，see *infra* ＊4.

このような筆者の，特に第1偈全体の4分の3（以上！）にも及ぶというかなり長大な欠落部に対する補い＝復原・再構の試みがどれ程正鵠を射得ているのかということについては，筆者としては実は心許ない限りであるが，そして実際にも識者の眼などからすれば噴飯ものということになるのかもしれないが，否，むしろそれ以上に，このようなことを行ったり試みようとすること自体が不遜であったり，また学徒（学問の徒）や研究者などとしての領分を越えるものとして問題乃至疑問視され，更には批判の対象ともなるのかもしれないが——特に，厳格で厳密な文献批判（のみ？）をもって任じられるような方からは——，それらのこと（問題点や批判など）についてはともかくとして，このようなことを試みてみることも決して無意味で無益な許りではあるまいと思われることから，敢て行ってみたという次第である。

それはともかく，ここで，この裏面に対しても前の表面と同様のことを，つまり残された現存テキスト部分からそれのサンスクリット——若しくは，仏教梵語——形への回復・復原や，和訳等のことを行ってみることにしたい。

……

……

……

…[20] [sa rvi e ka ma na sa . . d]i ta [śru no tha][21] 1

−−∪ | −∪∪ | ∪−∪ | ∪−∪ | −∪̲

−−∪ | −∪∪ | ∪−∪ | ∪−∪ | −∪̲

−−∪ | −∪∪ | ∪−∪ | ∪−∪ | −∪̲

(*taṃ**1) sarvi*2 ekamanasā (*mu*)ditāḥ*3 śruṇotha*4 ‖1‖

śudh[artha][22] saṃgha sa da ta śuci vi gha [ga rbha][23]
nāsti vivarna carana[12] upalabhi saṃghe
yeṣā vivarna carana[12] te bahirdha saṃghe
ye cā viśudha carana[12] upalabhi saṃghe 2

śuddhārtha*5 saṃgha satataṃ*6 śuci laddhalābho*7
(*8 nāstī vivarṇa caraṇaṃ*8) upalabbhi*9 saṃghe |
yeṣāṃ vivarṇa caraṇaṃ ti*10 bahirdha saṃghe
ye cā viśuddhacaraṇā upalabbhi*9 saṃghe ‖2‖

ye cā viśudha manasvina vi ..[24] kta bu ..
.....[25] [upala] bhi saṃghe
.....
..... (3)

ye cā viśuddhamanasvīna*11 vimukta*12bu (*ddhī*)*13
— — ∪ — ∪ ∪ ∪ — upalabbhi*9 saṃghe |
— — ∪ | — ∪ ∪ | ∪ — ∪ | ∪ — ∪ | — ∪
— — ∪ | — ∪ ∪ | ∪ — ∪ | ∪ — ∪ | — ∪ ‖3‖

.....
.....[26] [ne ya ti va ta .i[27]]
ye .. [vi] .. .. [ca ra na[12]] .. [..] saṃ ghi ni sa[28]
ye bhoṃti śīla rahita te bahirdha saṃghe 4

— — ∪ | — ∪ ∪ | ∪ — ∪ | ∪ — ∪ | — ∪
— — ∪ — ∪ ∪ ∪ — (*14 ne ya ti va ta .i*14) |
(*15 ye (*ṣāṃ*) vi (*varṇa*) caraṇaṃ*15) (*16 (*ti**17 *na*)*16) saṃghi*18
nityaṃ*19

ye bhonti*20 śīlarahitāḥ ti*10 bahirdha saṃghe ‖4‖

yatha gotami grahiya vastra suvarna varna
niryādayāti upagaṃmya narārṣabhasya
saṃghi dadahi avayāti [na eva] śasta
..... (4 1)

yatha*21 gotamī grahiya*22 vastra suvarṇavarṇaṃ
niryādayāti*23 upagamya*24 nara*25rṣabhasya |
saṃghe*26 dadāhi*27 avayāti na eva śāstā
(*28 — — ∪ | — ∪ ∪ | ∪ — ∪ | ∪ — ∪ | — ∪̲ *28) ‖5‖

.....
...29 [ryā]dayāti upagaṃmya nararṣabhasya
saṃghi datahi avayāti na eva śasta
[a tra ca .i rna30] vipula ma [mu śa] vipula 4 2

(*29 — — ∪ | — ∪ ∪ | ∪ — ∪ | ∪ — ∪ | — ∪̲ *29)
(*ni*)ryādayāti*23, *30 upagamya*24 nararṣabhasya |
saṃghe*26 dadāhi*27 avayāti na eva śāstā
(*31 evaṃ ca saṃgha*31) vipulo (*32ma mu śa*32) vipula*33 ‖6‖

yo aṭha varna abhani muni satamasya
so sahasrāčha avaci upasaṃkramitva
kvā y[e] ṭha bhoti vipula vinayāhi kāṃčha
tasya jina avaci saṃghi guruktam asya 4 3

yo aṭṭha*34 varṇa abhaṇī*35 munisattamasya
sa*36 sahasra-akṣa*37 avacī*38 upasaṃkramitvā |
(*39 kvā yeṣa*40 bhoti*41 vipulā vinayāya kāṃkṣā*39)
tasyā jino avaci saṃghi*18 guruttamasya*42 ‖7‖

yavaṃti [a pra ti me] .....

.....

.....[31] upalabhi [bhuyo[32]]

yatha śo bha[33] na[34] ga na va ra[34] ga na utamasya $\frac{4}{4}$

yāvanti apratimi*[43] — ∪ ∪ — ∪ — ∪

— — ∪ | — ∪ ∪ | ∪ — ∪ | ∪ — ∪ | — ∪

— — ∪ — ∪ ∪ ∪ — upalabbhi*[9] bhūyo

yatha*[21] śobhano (*[44]gaṇavaro gaṇa-uttamasya*[44]), *[45] ‖ 8 ‖

[ye] cakravarti [j]i[na]na anuvart.. [ki .ti]

abhiṃna marga sugate paripālayaṃti

dukhā ca dukha prabhava ca nirodha marga

te praña pāraṃmi gate upalabhi saṃghe $\frac{4}{4}$ 1

(*[46] ye cakravarti*[47] jinanāṃ anuvartya kīrtiṃ*[46])

ābhinna*[48] mārga sugate paripālayanti |

dukkhaś*[49] ca dukkha-prabhavaś*[50] ca nirodha mārgaḥ

te prañña*[51]pāramigate*[52] upalabbhi*[9] saṃghe ‖ 9 ‖

ye prā r[35] naṃ ti piḍ'akāni samāpta trīni

.....

..... [36] [pra śa cha da]

te tādrṛśa śruta balenupalabhi saṃghe $\frac{4}{4}$ 2

ye prājananti*[53] piṭakāni samāpta trīṇi

— — ∪ | — ∪ ∪ | ∪ — ∪ | ∪ — ∪ | — ∪

— — ∪ — ∪ ∪ ∪ — ∪ ∪ (*[54] pra śa cha da*[54])

te tādṛśāḥ śrutabalen' upalabbhi*[9] saṃghe ‖10‖

ye . . . . la[37]dhva bahudhā na janeṃti harṣa
[utsuka] teṣa bhavati alabhitva lābha
meru va parvata samaṃ akhila akupya
te śaila rāja sadrṛśa upalabhi saṃghi [$\frac{4}{4}$ 3]

ye (*lābha**55) laddhva*56 bahudhā na*57 janenti*58 harṣaṃ
utsūka teṣa*59 bhavatī alabhitva*60 lābhaṃ |
(*61 merū va*61) parvatasamaṃ akhilaṃ akupya
te śailarājasadṛśā upalabbhi*9 saṃghe*62 ‖11‖

yeṣā na [ṣu ji ta]m ihaṃ tribhava [na kiṃ ci]
.....[38] [ca] . . [su] . . [na] . .
[ye] . . [bha ya na sa va] . . [yo parivarja]yaṃti
[ṣu]kha jita jina suta upalabhi saṃghe 10 2

yeṣāṃ na śocitam*63 ihaṃ*64 tribhavāna*65 kiṃci
— — ∪ — ∪ ∪ ∪ — (*66 ca ∪ su ∪ na ∪*66) |
ye (*ṣāṃ*)*67 bhayo na (*68 sa va . . yo*68) parivarjayanti
śokā*69 jitā jinasutā upalabbhi*9 saṃghe ‖12‖

ye ca vi[vikta][39] sug[u]na[40] giri kāṃtareṣu
achaṃbhiyo yatha ca siṃgha mṛgana[12] rāja
śuṃnya vihāri paramaṃ aranā vihāri
te jāna parami gata [u]palabhi saṃghe [10 3]

ye cā vivikta suguṇā girikāntareṣu
acchaṃbhiyo*70 yatha ca siṃgha*71 mṛgāṇa*72 rājā |
śūnyā*73vihāri paramaṃ araṇāvihārī
te jhāna*74pāramigatā upalabbhi*9 saṃghe ‖13‖

……

……

……

……[41] [na ca raṃ ti] guna aprameka 10 4

——∪ | —∪∪ | ∪—∪ | ∪—∪ | —∪̲

——∪ | —∪∪ | ∪—∪ | ∪—∪ | —∪̲

——∪ | —∪∪ | ∪—∪ | ∪—∪ | —∪̲

——∪—∪ na*[75] caranti guṇāpramekāḥ*[76] ‖14‖

[20] *forty-four (or forty-three) akṣaras lost.* [21] [bhiṃni marg.]. [22] [o ya]. [23] [la bhaṃ]. [24] -mu-;-vi-. [25] *eight akṣaras lost.* [26] *fifty akṣaras and the numeral* 3 *lost.* [27] -thā. [28] tsa. [29] *twenty-nine akṣaras and the numeral* 5 *lost.* [30] nu. [31] *twenty-nine akṣaras lost.* [32] -yi. [33] ka. [34] ro. [35] hū. [36] *twenty-four akṣaras lost.* [37] la-. [38] *eight akṣaras lost.* [39] -stita. [40] saṃ[ta tra]. [41] *forty-six akṣaras lost.*

〔和　訳〕

1. ……（それを？）汝（おんみ）らは皆心を一にし，喜悦（よろこび）〔の心をもっ〕て聴け（聴くがよい）。
2. 僧伽は清浄（きよらか）な目的をもつものであり，それは何時も白浄（きよらか）で，所得多き（原意は，所得を得た＝目的を達成した）ものである。〔それ故〕不品行な行いのない〔者たちが〕僧伽には見出されるであろう（または，見出さるべきである，見出されんことを，など。以下も同じ）。不品行な行いのある者たちは僧伽の外にあり（＝僧伽にはいず），そして清浄な行いの者たち〔のみ〕が僧伽には見出されるであろう。
3. また，清浄な心を有し，解脱した（＝汚れのない）知性をもつ……〔者たちが〕僧伽には見出されるであろう……
4. ……不品行な行いのある者たちは常に僧伽にはいず，戒の欠如者たる者

たちは（も）僧伽の外にある〔であろう〕（または，ある〔べきである〕，あら〔んことを〕，など）。

5. 例えば，〔仏の姨母の〕ゴータミーが金色の衣を手に執って〔仏の許に〕行き，近づいて牡牛のような人（＝仏）に〔それを献上げようとしたときに〕，大師（仏）は「僧伽に布施せよ」〔と言われて〕決して〔それに〕近寄ろうと（＝手にしようと）されなかった（が，このように？）……

6. ……行き，近づいて牡牛のような人に〔それを献上げようとしたときに〕，大師は「僧伽に布施せよ」〔と言われて〕決して〔それに〕近寄ろうとされなかったが，このように僧伽は広大（＝偉大）で……

7. その時，7番目の聖者（＝釈尊）に対して称讃の辞を述べた者〔があり，彼〕は，千の眼を有する方（＝仏）の側に行って，〔次のように〕申し上げた，「律に対して広大な希求心のある（＝律を非常に希求している）者たちは，〔一体〕どこに（どこかに？）いるのでしょうか」。その，僧伽の中の最上の師に，ジナ（勝者＝仏）は〔次のように〕言われた。

8. 「無比の……限り，……（僧伽には？）更に見出されるであろう。あたかも，最上の共同体（＝僧伽）には，素晴しい，最高の〔人々の〕集まりがあるように（または，最上の功徳を有する人〔＝仏？〕には，素晴しい，最高の功徳がある〔＝具わっている〕ように，など）。

9. 〔法〕輪を転じられる〔方である〕ジナたちに対して〔その〕名声を高めて，スガタ（善逝＝仏）における（または，スガタへの〔＝に至る〕？）不壊の道を護る者，〔その道とは〕苦と苦の原因と〔苦の〕滅と〔苦の滅への〕道と〔いう四諦（の謂？）〕であるが，そのような，般若波羅蜜を得た者たちが僧伽には見出されるであろう。

10. 〔経・律・論の〕三蔵に完全に通暁し，……このような，知識力を具えた者たちが僧伽には見出されるであろう。

11. さまざまな形で所得（得べきもの）を得ても喜悦心を生ぜず，〔反対に〕所得を得なくても憂懼は〔なく〕，須弥山の如く，山のように〔泰然として〕少しも瞋ることのない，その山々の王のような者たちが僧伽には見出

されるであろう。

12. ここで（この世において），〔欲有・色有・無色有の〕三有（生存の3種の在り方）に対する如何なる愁苦もなく，……恐怖心がなく，……除き去る（去った）者，〔その〕悲愁に打ち負かされないジナの息子たちが僧伽には見出されるであろう。

13. また，孤独で（人里を離れて），善徳を具えて，山の洞窟に〔住み〕，そして〔百〕獣の王たる獅子のように怖畏心がなく，空に住し，無諍（諍のない境地）に住する者，そのような，禅定波羅蜜を得た者たちが僧伽には見出されるであろう。

14. ……無量の功徳を具えた者たちは，行かない（動じない？）〔であろう〕（？）

＊1　＝*tad.*
この語は，文法的には，前の文を承け若しくは表すものとして，中性（*A.sg., n.*）の *tad*> *tat* をそのまま想定し推測すべきところであろうが，ただ，韻律上この部分には1音節でしかも長音の語が期待—要求されるため，この文書即ちカローシュティー文字の綴字法ということも考慮して，このような語形を想定してみた（因みに，文章的には，この第4詩句の行頭のこの位置には動詞の śruṇotha の主語か若しくは目的語のどちらかが来ていたろうことは比較的容易に推測されようが，その中，主語は，例えば yūyaṃ<yūyam の如く〔長音の〕2音節となってしまうので，この場合には不可ということになろう）。

＊2　＝sarve, *m.c.*

＊3　この語の欠落した——判読不能な——字の部分には，韻律上短音が来る（すなわち，欠落した音節は短音節となる）ことが知られるが，文意上ということも考慮して，このような語形を想定し，復原し補ってみた。

＊4　*or* śruṇātha？＝śṛṇuta. (*m.c.* も加味した？ BHS 形。なお，同じ BHS における śruṇatha [>śruṇātha？ *m.c.*] の方の語形については，see *BHSG*, §24.7.)

＊5　この語は，底本の異読に従って——異読を採用して——śuddho ya の如く読み，解することも必ずしも不可能ではないが（ただし，その場合には，後の＊6に述べること—理由によって，次の saṃgha の語を中性〔の主格（*N.sg., n.*）〕と見なければならなくなるので，更に śuddha*ṃ* ya の如く改むべきということになろう），しかし，もしそう解した場合には，一文中に略同義の śuddha- と後に来る śuci- の両語が重なり競合することになってしまって，あまり面白くない——つまり，幾分，

と言うかむしろ多分に，不都合？——ということになろう。そこで，ここでは暫く底本の読みのまま，それに従っておくことにした。

＊6　原綴の sa da ta の3字＝3音からは，sada taṃ (＝sadā tam/tad) と satataṃ (<satatam) という2つの語形が想定・復原（回復）されようが，そのどちらの語形—語句を採るにしても，共に多少の疑問や問題点等は免れないようである。例えば，先ず後者の satataṃ に関して言えば，第2，第3音節の同じ t の子音に対して原綴では第2字と第3字にそれぞれ別の字（音＝子音）が，特に第2字には d の音—字が充てられているということ，一方また前者の sada taṃ に関しても，前語 (sada＝sadā) の方には特に問題等はないにしても，後の taṃ に関しては，文意上この語形は対格ではなく主格を表すと見られしたがってその「性」も男性よりは中性と——すなわち，taṃ<tam は（男性の対格 [*A.sg., m.*] ではなくて）中性！の主格 (*N.sg., n.*) を表すと——見るべきものということになろうが，もしそうとするとそれを受けるべき（taṃ<tam が係る，つまりそれに修飾される）saṃgha- も当然同じ中性と見るべきことになるであろう，ということである（因みに，該 saṃgha- の語は，Skt. 及びパーリ語では共に男性とされている）。

こうして，原綴のこの3字＝3音が表す——表そうとする？——語形については，共にそれぞれ何らかの意味や形で疑問や困難等を避け得ないということになるが，ここでは，字音＝綴字法上の問題点よりは saṃgha- の「性」を優先させるということで，satataṃ (<satatam) の方を採っておくことにした。

＊7　この語の原綴の vi gha [ga rbha] なる字音は，解釈＝復原がやや——かなり！？——難しいもののように思われる。と言うのも，これの後半部のつまり［　］内の語形に関しては，その標記 (ga rbha) 或いは異読 (la bha) から，それが garbha- 若しくは lābha- ——ともに名詞——を表したものと見て大過ないように思われようが，しかしその一方，前半部の vi gha の綴字—字音から（前者の音節は韻律上長音となることが要請—要求されるということも加えて）想定される viggha＝vighna-, vigga＝vigna- 乃至 vega- 等の語形は，単独で，或いは複合語 (compound) としても，それらを前記の garbha- や lābha- と結び付けようとしてもそれ程意味の通じるようなもの＝語句はできないように思われるからである。

ということで，ここでは，文意や用語の適切さ，つまりあまり特異で特殊な語や言い回し等は用いたりなされなかったのではないかということも考慮しつつ，字形上の問題は，特に第2字に関しては多少——というよりも，かなり？！——残るかもしれないが，vi は la の，また gha は dha のそれぞれ写誤—誤読ではないかと見て，（後半部は異読の方を採用する形で）かく解し，改めてみることにした（因みに，これ即ち labdhalābha- の語そのものではないが，同工の言表 ＝lābham √labh の語句—文言は第11偈にも見られる。See *infra* v. 11, pāda b [& a].）。

（＊8…＊8）　ここでは，文脈上，この言表通りにではなく，前後に関係代名詞を伴った，すなわち *yeṣāṃ* nāsti vivarṇaṃ caraṇaṃ *te* の意味で言われ表現されているも

のと考えられる（ここでも，そのように解し，訳も付けておいた）。

＊9　<upalabbhe, *m.c.* =upalabhyeran.

底本の upa∞labhi なる語形—読みからは，（韻律上，この語の第3音節は長音で，それ以外は全て短音節となるということ等も考慮に入れて）幾つかの復原—再興形が可能なように思われようが，ここでは，この語の語形や意味，それに綴字法——特に，「∞」の記号の用法——上の特徴等から，この語形は受身の願望法（3*pl.opt., pass.*）を表すものと見て，かく解し復原してみることにした。因みに，√ labh の受身の語幹が labbha（=labhya）となることについては特に問題はないであろうが，（受身の，すなわち Ātmanepada の）願望法の複数3人称の語尾が BHS では e ともなる（なり得る！）——すなわち，受身にも Ātmanepada の代りに Parasmaipada の語尾が用いられ，その願望法の（Parasmaipada の）複数3人称の語尾が e でも表され得る——ことについては，see *BHSG*, §37.10 & §29.15.

＊10　*or* ta？（原綴の te は，文法的には正しいが，韻律上ここの音節は短音となって長音が許されないため，かく改める。）

＊11　=-manasvinas, *m.c.*

なお，原綴の sv の重子音は，そのままではそれに先立つ音節を長くすることになるが，当該の音節は韻律上は短音でなければならない（短音であることが要求される）ため，或いは単子音として扱われ——単子音的に，つまり例えば -manasīna のように読まれ=発音され——ていたのかもしれない。

＊12　底本の欠落——判読不能——字を，注に示された異読により補う（注には，異読？として mu, vi 2つの読みが与えられているが，或いは，後者の読みを採って vivikta- とすることも可？）。

＊13　=-buddhayas.（文意や語意，及び綴字法上の特徴等から，このような語形を想定し，復原し補ってみた。なお，i 語基の男性の複数の主格 [*N.pl., m.*]〔及び，対格も〕が BHS で -ī と〔も〕なることについては，see *BHSG*, §10.179. 因みに，同所には asaṅga*buddhī* 及び bāla*buddhī* という例——実例！——も掲出されている。）

（＊14…＊14）　この部分，底本の読みのままでは字音がやや区々過ぎて語や句をなす程には繋がらず，復原—再興不能。

（＊15…＊15）　*or* ye (*cā*) vi (*varṇa*) caraṇāḥ？

（＊16…＊16）　底本の2字の欠落——判読不能——字は，文意上（及び韻律上）かく想定し，復原し補ってみた。

＊17　or *ta ? = te*, m.c.

＊18　=saṃghe, *m.c.*

＊19　原綴の sa は，字形上は多少問題があるかもしれないが，異読の tsa を参考に，文意等も考慮して，かく訂正し復原してみた。

＊20　=bhavanti, *m.c.*（この bhava>bho の語幹形については，前項の＊37，＊40，

及び後の＊41も併せ参照。)

＊21 =yathā, *m.c.* (なお，この語の部分は，短音２つで長音に代えるという，所謂る hypermetric の形になっている。)

＊22 gṛhītvā の (*m.c.* も含めた) BHS 形。なお，この語形の場合も含めて，BHS における (tvā ではなく) iya<ya の接尾辞による Gerund の用例と形などについては，see *BHSG*, §§35. 37-44.

＊23 *or* niryātayāti ? =niryātayati, *m.c.* (この語の語形と，特に語義に関しては，see *BHSD*, s.v. 'niryātayati.')

＊24 原綴の gaṃ の ṃ は，次の m に引かれてのもの？ (同様の例は，表面の場合にも見られた。表面の第11偈，及び前項の＊63を共に参照。)

＊25 原綴の rā は，この音節——正確には，これを含む音節——が長音節であることを示すためのもの？ (同様の例は，表面の場合にも見られた。表面の第１偈第３詩句の中の anālpakaṃ, 及び前項の＊７を共に参照。) ここでは，これの母音を長くすべき特別の理由等もないため，かく (短母音に) 改める。なお，次の第６偈における同語の綴字法も併せ参照。

＊26 原綴の ghi は，韻律を見誤って短音節と考えてのもの？ ここでは，韻律上この音節は長くなるため，言わば正規の Skt. 形に復す形にもなるが，かく改めることにした。

＊27 Pa. *id.* (& *also* dehi) =dehi.

(＊28…＊28) この第５偈は，一見して明らかなように，次の第６偈と並行する (パラレルな) 言表及び内容のもの＝文になっていると考えられる。そこで，そのことつまり第５，６の両偈が並行文 (パラレル) をなしているとのことから，そしてまた両偈の第２，３詩句が全同となっていることからも比較的容易に推測されるように異なるのはただ第１詩句の部分のみとすれば，この第４詩句にも次の第６偈の第４詩句と大略同じ言表一文言のものを，すなわち，例えば evaṃ sa saṃgha vipulo ... の如き言表の文句 (文) などを，推測一想定し補ってやることもできるかもしれない。

(＊29…＊29) この第１詩句の部分にも，前の第５偈の場合と同様に，ある人物名とその人物が何かある物を仏に供養一布施しようとしたという，仏伝上かなり！一若しくは，少なくともある程度——よく知られた伝承乃至挿話が記され述べられていたのではないかと推測一想像されるが，それが果してどのようなものであったのか，内容等は一切不明なので，したがって，この部分の回復一復原も不可能ということになろう。

＊30 この語は，前の第５偈の第２詩句の niryādayāti と同じもの＝語を表すと考えられるので，それを基に，かく復原し補ってみた。

(＊31…＊31) この第６偈は，第５偈と並行文をなしていると考えられるが，その第５偈の第１詩句の部分を見ると，構文上同偈は yatha＝yathā で始まる関係副詞文

になっていることが知られる。そこで，この第6偈も同じ関係副詞の構文で表され，つまり第1詩句が yatha＝yathā で始まっていたとすると，この第4詩句にはその関係副詞の yatha＝yathā を受ける例えば tathā 若しくは evam 等の副詞の来ることが推測されよう。一方また，ここでは僧伽の功徳や優越性等のことが説かれているわけであるから，このようなことを基に若しくは考慮しつつ，原綴の a は e の，また tra は vaṃ の，.i は saṃ の，そして rna は gha の，それぞれ謂——誤字若しくは誤読？——と見て，かく解し回復・復原してみることにした。実際にも，字形上もそのような写誤等のことは全く有り得ないことではないと，少なくとも筆者には考えられ想定されるわけであるが，果して如何なものであろうか。

(＊32…＊32)　この部分，底本の読みのままでは字音がやや区々過ぎて語や句をなす程には繋がらず，復原—再構不能。

＊33　底本のこの読みは，原綴のままでは韻律と合致せず（韻律上，この語の第2音節は長音となることが要求される），また前の vipulo とも重複してしまうことになるので，何らかの写誤—誤読があるのではないかとも考えられるが，それ（ら？）が何であるのかは不明なため，今は暫くこのままで置くことにする。

＊34　Pa. *id.* (*& also* attha) ＝atra.

＊35　＝abhāṇi, *m.c.?* (*or rather* ＝abhāṇīt？なお，後の第2詩句の avacī の語形も併せ参照。)

＊36　原綴の so は，文法的にも，また韻律上ここの音節は短音となって長音が許されことからも，かく改める（因みに，この部分も，この sa と次の語頭の sa の短音2つで長音に代える所謂る hypermetric の形になっている)。

＊37　*or* -akṣu？ ＝-akṣam.

底本の sahasrāčha (＝sahasrākṣa-) の読み—語形は，複合語として連声法 (Sandhi) 的には正しいが，韻律の都合上，ここではこのように，つまり一見連声せず母音接続 (hiatus) を起しているような形に，改める（そのこと，つまり母音接続しているが実は複合語であることを示すため，ここでは，ハイフンを付けて表すことにした)。

＊38　＝avāci, *m.c.?* (なお，前の第1詩句の abhaṇī, 及び後の第4詩句の avaci の両語形も併せ参照。因みに，BHS には，〔アオリスト [*3sg.aor., P.*] 形として〕これと後者の avaci の両方とも見られる。See *BHSG*, § 32. 24.)

(＊39…＊39)　この第3詩句の部分は，特に底本の読みそのままの形では，文意がよく通じないところがあるように思われる（特に，原綴の vinayāhi の語形が，これをそのまま vinayebhis と取るにせよ，或いは vinaya hi——vinaya は，この場合には動詞 [*2sg.impv., P.*]——の意に解するにせよ，文章の中での意味がよく分らない)。そこで，ここでは，字形上は多少問題なしとはしないかもしれないが，原綴の ṭha は ṣa（或いは，むしろ ṣu？) の，また hi は ya の，それぞれ写誤—誤読と見，またこの第3詩句は kva *te santi/bhavanti* yeṣāṃ bhavati vinayāya vipulā

kāṅkṣā の如き文意を表そうとしたものと考えて，かく解し改めてみることにした。

＊40 *or* yeṣu？ ＝yeṣām, *m.c.*

＊41 ＝bhavati, *m.c.* (この bhava＞bho の語幹形については，前項の＊37，＊40，及び前の＊20も併せ参照。)

＊42 ＝gurūttamasya. (原綴の guruktam asya をかく改める〔べき？〕ことについては，前項の＊9を参照。)

＊43 *or* apratima？ 原綴の me は，文法的には恐らく正しいのであろうが，韻律上はこの語のこの位置の音節は短くなることが要求されるので，かく改める。

(＊44…＊44) この gaṇavaro, gaṇa-uttamasya の gaṇa- は，文意上は共に guṇa- の意に解する——したがって，そう改める？！—ことも可。その (gaṇa-, guṇa- の) どちらに解すべきかについては，この第8偈は欠落部が多く，残された部分だけから判定—判断するのはやや——かなり？——難しいように思われる。そこで，ここでは，言わば暫定的に (底本の読み＝原綴にも従う形で) かく解しておくことにした。

＊45 ＝gaṇottamasya.

複合語としてのこの語の前分の gaṇa- と後分の uttama- が一見連声せずに母音接続をなしているように見えるのは，韻律上の都合—理由による (＊37 の場合と同様に，ここでもハイフンを付してそのこと〔＝母音接続〕を示しておくことにする)。因みに，この語 (gaṇottama-) は，表面の第1～3偈の各第4詩句の部分にも共に見られ，またそこでは「最上の共同体」として僧伽の意に解しておいたが，この第8偈では，もしこの語を「共同体の中の最上者」の意に取ることにすれば，原綴の ga na utamasya は複合語とはせずそのまま gaṇa uttamasya＜gaṇe uttamasya として見ることも出来るかもしれない。

(＊46…＊46) この第1詩句の部分は，一部には欠字——判読不能字——も存するということもあって，それだけ余計に理解や解釈も難しいもののように思われる。ここでは，ここに示したそれとは別様の捉え方や解釈等も当然可能で，またいろいろ考えられるであろうが，取敢えずこのように欠落部を補って回復・復原し，そして和訳や次の ＊47 などに示した如く解しておくことにした。

＊47 この語は，通常は世俗界の最高位者である「転輪聖王」を表す語であるが，この場合には，その転輪聖王の意ではこの第1詩句は (かなり！？) 文意が取り難くなると思われるので，ここでは，その特に前半の cakra- は *dharma*cakra- の意で，つまりこの語自体も例えば *dharma*cakra*pra*vartin- の如きもの (意味) を表し，その意味で用いられていると解することにした。因みに，このような語形の語は通常の辞典等には見られない——見出語として採録されていない——が，それは，一つには韻律上の制約という理由に (も) よるとして，意味の上ではそれら (辞典類) に掲出されている dharmacakrapravartana-/⁰vartaka- などと同じものと見る，ということである。

なお，念のために付言すれば，その際，この cakravarti と次の jinanāṃ＝jinānām の両語の関係については，（後者を前者の目的語——意味上の——の如く，すなわち「ジナ（＝仏）たちに対して〔法〕輪を転じる者」の意に，ではなく）両者は同格——若しくは，前者は後者に係る修飾語——と見，そう解すべきものということになろう。

＊48　＝abhinna-, *m.c.*

＊49　原綴の khā は，この音節が長音節であることを示すためのもの？（この点，及びこれの母音を短母音に改めたことに関しては，前の ＊25 も併せ参照。）

＊50　ここでは，原綴の pr は，韻律上は単子音として扱われている（この点については，またハイフンの意味についても，前項の ＊44 も併せ参照）

＊51　*or* prajña- ？＝prajñā-, *m.c.*

＊52　*or* -pāramigatā ？（すなわち，原綴の te は，ta/tā の写誤—誤読？　若しくは，文頭の代名詞の te に引かれてのもの？　なお，この点，つまり -pāramigate/-gatā の語形の問題に関しては，後の第13偈の第 4 詩句の場合の例＝綴字法も併せ参照。また，原綴の raṃ の ṃ は，次の m に引かれてのもの？　その後者の点に関しては，前の ＊24 も併せ参照。因みに，この場合には，韻律上はこの音節は〔＊24 の場合とは異なって〕短くなる。）

＊53　＝prajānanti, *m.c.*

原綴の ī（及び，異読の hu も）は，そのままでは意味をなさない——意味をなす語とはならない——ので，ここでは，字形上は多少問題なしとはしないかもしれないが，文意等のことを考えて，この字は ja の（或いは，むしろ jaṃ/jāṃ の？ ただし，字末の ṃ は次の n に引かれてのもの？として）写誤—誤読ではないかと考えて，かく想定し復原してみることにした。

（＊54…＊54）　この部分，底本の読みのままでは字音がやや区々過ぎて語や句をなす程には繋がらず，復原—再興不能。

＊55　＝or *lābhu ? = lābham,* m.c.（次の第 2 詩句の alabhitva lābhaṃ の言表を参考に，次の laddhva＝labdhvā と共にそれとは反対の意を表そうとしたものと考えて，かく補い回復・復原してみた。）

＊56　＜laddhvā, *m.c.* ＝labdhvā.

＊57　この否定辞の na は，文意上次の第 2 詩句にも係る——若しくは，第 2 詩句には同語が省略されている？——と考えられる。

＊58　Pa. *id.* (*& also* janayanti)＝janayanti, *m.c.*

＊59　*or* teṣu ? *m.c.* ＝teṣām.

＊60　＜alabhitvā, *m.c. ?* ＝alabdhvā. (*or rather* ＝alabhya ? なお，この言わば不正規の？語形については，第 1 詩句の ladhva＜laddhvā ＝labdhvā の〔正規の？つまり aniṭ の〕語形も併せ参照。）

（＊61…＊61）　＝merur iva.（ここでは，meru va という底本の読みを言わばそのま

ま活かす形でかく回復・復原してみたが，韻律上は——また，〔BHS としての〕文法上も？——merur va の如くすることも可。)

*62 原綴の ghi は，ghe の写誤—誤読？（或いは，前語の upalabhi の bhi に引かれてのもの＝写誤？）

*63 原綴の ṣu は，そのままでは意味をなす語とはならないので，śu の転音——若しくは，写誤—誤読？——などではないかと考え，かく解し改めてみた。

*64 *or* ihā ? =iha, *m.c.* (原綴の haṃ は ha/hā の写誤—誤読？)

*65 *or* -bhavānu ? =-bhavānām, *m.c.*

(*66…*66) この部分，底本の読みのままでは字音がやや区々過ぎて語や句をなす程には繋がらず，復原—再興不能。

*67 底本の欠字——判読不明字——を，文意を考えて，かく補い復原してみた。

(*68…*68) この部分，底本の読みのままでは字音がやや区々過ぎ，また韻律的にも1音超過することになって余計に，語や句をなす程には繋がらず，復原—再興不能。

*69 原綴の [ṣu] 及び kha は，そのままでは意味をなす語や句にはならないので，それぞれ śu 及び ka の転音——若しくは，写誤—誤読？——などではないかと考え，かく解し改めてみた。

*70 =astambhinas (?) この acchambhin- (Pa. *id.*) の語については，see *BHSD*, s. v. (また，-in 語基の男性・複数の主格〔及び対格〕の語尾が -iyo で〔も〕表されることについては，see *BHSG*, §10. 168.)

*71 =siṃha- (siṃhas).

*72 *or* mṛgāṇu ? =mṛgāṇām, *m.c.*

*73 原綴の śuṃ の ṃ は，次の n に引かれてのもの？（この点に関しては，前の*24及び*52も併せ参照。)

*74 Pa. *id.* =dhyāna-.

この語の原綴の ja は，(頭音の子音の) j/jh の音の交替や変化，若しくは混同などを表すというよりも，この文字即ちカローシュティー文字の用法上の都合や理由によるもので，つまり，このカローシュティー文字の体系では，通常？字母の jh は Skt. にはないイラン語系の z の音を表すために充てられて，そのためにインド語の jh を表す場合にもそのままは使えないために，代りに用いられたものであろう（この点，つまりカローシュティー文字における jh の用法—用字に関しては，例えば *Kharoṣṭhī Inscriptions*, pt. III, p. 303 などを参照)。

*75 この na は，否定辞の na か，それとも前語の語末を表すのかは，これの前の部分が知られないので，不明。

*76 =guṇāprameyās.

底本の guna aprameka の読みは，これをそのまま活して採るとすれば，例えば guṇa-apramekaḥ/⁰kāḥ の如く，前語と後語が母音接続を保ったままの——つまり，

連声していない形の——複合語と解すべきものということになろうが，そしてこの語句だけに限って言えばそれで一向に不都合等はないわけであるが，ただ，そう解し復原した場合には，韻律上この語の前に来る字音——字の読み——や語形の復原等にかなり大きな変更を余儀なくされるということになろう。具体的には，例えば原綴の [ca raṃ ti] は2字目の raṃ を ra と読み変えて（すなわち，raṃ は ra の写誤—誤読と見て）caratī の如く回復・復原し，更に carati（または，caranti!）の韻律上の理由—都合による変形と見ることになる，など。そして，この場合には，その両者，つまり底本の guna aprameka の読みを連声した——正規の！——複合語の形に改めることと，それの前の [ca raṃ ti] の読みにも回復—復原した語形にも大きな？変更を加えることのどちらを選ぶかということになろうが，ここでは，いくつかの理由から前者の方が都合がよいように考え，そちら（前者）を選んでかく改めてみることにした。

なお，念のために付言すれば，原綴の aprame*k*a は aprame*y*a- の言わばガンダーラ語形とも言うべきもの＝語形。

5　おわりに

以上，前世紀つまり20世紀の初期にイギリスのスタインによって中央アジアの東トルキスタン地方の沙漠の中のニヤ (Niya) なる一オアシス遺跡から出土・発見されたカローシュティー文字で表された一連の文書群の中で '511' の整理番号を与えられたもの＝文書（テキスト）について，検討乃至考察らしきものを筆者なりに些か乍ら試みてみた。すなわち，この文書（テキスト）というのは，カローシュティー文字特有の綴字法によって表され乍らも，これが偈頌で表されたものであるということから，その韻律を基に，または参考に，その原語について少しく調べてみると，実は通常同文字が表すとされるガンダーラ語 (Gāndhārī) よりはサンスクリット——と言うか，むしろ，それに一部プラークリット的な要素も交えた形の，仏教梵語 (Buddhist hybrid Sanskrit) ——により近く思われ，したがって，もともとはそれ——仏教梵語！——で表されていたものがただ標記—綴字法だけガンダーラ語的に改められただけのものと見て，元の（仏教梵語の）形への回復・復原若しくは再構と，それからの和訳等のことを行ってみた，というわけである。何分，菲才の身にて，そのような

筆者の試みも，その意気込とは裏腹にどれ程正鵠を射ることが出来，したがって功も奏し得たのかということについては筆者としては忸怩たる思いを禁じ得ず，その点ただ識者の批正と示教を俟つのみであるが，ともあれ，それらのことはさて置いて，例え未熟で拙いものではあっても，本稿がこの方面の研究に対して何程かでも資するところがあったとすれば，筆者としては幸いということになろう。

この，主としてスタイン——及び，他の探検家たち——によって中央アジアから発見・発掘されて将来されたカローシュティー文書は，特にわが国では歴史学者，就中東洋史の中でも中央アジア——特に，古代の？——を専門にする学者からは一部注目され，研究もある程度はなされたものの，それ以外の例えばインド関係の研究者やとりわけ仏教学者などからはこれ迄あまり顧みられず，したがって研究もそれ程——殆ど？——されては来なかったようである。そのような中，近年はそうしたつまりインド関係や仏教関係の学者の中にも該文書に対して興味を有し，研究等を試みようとする人物もある程度現れるようになったが[64]，しかし，そのような学者や研究者による（インド学や仏教学の方面から見た）言わば本格的な研究はまだその緒に就いた許りで，今後に解決を俟つような問題や課題は多々残されているのではないかと思われる。ということで，そのような研究に後日を期しつつ，取敢えず本稿についてはこの辺で筆を擱くこととしたい。 (完)

注

57) 前稿は，「カローシュティー文書第511番について(1)」『創価大学人文論集』第13号，2001年。

58) この，摩訶波闍波提が仏に献上げようとしたのは，パーリの原典—原語では 'navaṃ dussayugaṃ' と表されている (see *MN*, vol. III, p. 253)。この語，就中 'dussayuga-' なる語の原意は「一対（または，一揃い，一組）の（よく練って？織られた）布」ということであるが (see, e.g., s.v. dussayuga-: *PTSD*='a suit of garments,' *PTC*='suit of clothes;' dussa-: *PTSD*='woven material, cloth, turban cloth; (upper) garment, clothes,' *PTC*='cloth, clothes,' *Childers*='cloth;' dūrśa-: *PW*='eine Art Gewebe oder Gewand,' *MW*='a kind of woven cloth or vesture;' dūṣya-:

PW='a) Zeug, Stoff oder eine Art Zeug; Kattun; b) Zelt,' *MW*='a tent; clothes or a kind of cloth, cotton, calico,' *BHSD*='a kind of cloth, apparently of cotton but of fine quality.'), これに対応すべきもの—語は漢訳では「新金縷黄色衣」の如くされ（訳され，若しくは改められ？）ている（大正1，721c参照)。ところで，その「金縷」なる語（訳語？）は No. 511の 'suvarṇavarṇa-' に対応するとも見得ようが，もしそうとして漢訳の原典—原文にもそれに相当するようなもの＝原語が実際にあったとすれば，これら—— 'suvarṇavarṇa-' と該「金縷」の原語？——は，或いは後世の付加（若しくは，増広？）などということになるのかもしれない。なお，この摩訶波闍波提による衣の供養—布施の伝承の出所（出典・典拠等）については，後注59) を参照。

59) *MN*, No. 142 'Dakkhiṇāvibhaṅgasutta,' vol. III, pp. 253-57, 及び『中阿含経』第180経「瞿曇弥経」(大正1，721c-23a) など参照（これら以外の出典・出所等については，例えば赤沼智善『印度仏教固有名詞辞典』の 'Mahāpajāpatī' の特に〔3〕の項などを参照)。なお，この第5偈（の内容）に関しては，簡単ながら蓮池氏も触れられている（前注38）に所掲の論文，参照)。

60) 実は，第5偈に続く第6偈でも，摩訶波闍波提による衣の供養—布施と同程度に，つまり比較的——かなり？！——よく知られた僧伽への布施の伝承乃至話が述べられ若しくは主題とされていたのではないかとも推測されるが，ただ，同偈の場合には，もしそうとすればその人物名や布施物などを示していると思われる第1詩句の部分が欠落している——判読不明な——ために，その人物が誰でまたその伝承—話がどのようなものであったのか等について窺ったり知ることはできない。

61) 因みに，それら9偈の中で，大略3行＝3詩句かそれ以上残されている——判読可能な——のは第5，6，12の計3偈，同じく2行（若しくは，それ以上）のそれは第4，8，10の3偈，そして1行前後かそれにも満たないものが第1，3，14の計3偈，ということにそれぞれなろう（この点に関しては，後掲のテキストの本文部分の各偈の箇所を参照)。

62) この点に関する特にバローの言については，前注36) を参照。

63) ここでは，出版されたテキストに付された注記については省略（それ＝テキストの注記については，次下のテキストの本文部分を参照)。また，筆者自身の補ったり復原・回復したりした語形等に対する注記は，後の本文部分との混同を避けるために，ここでは（＊ではなく）＃印を付けた番号で表すこととし，それに対する説明文はこの部分＝第1偈の復原・回復文の和訳の後に一括して掲げることにした。

64) 例えば，前稿で触れたものの他にも，近時赤松明彦氏による「楼蘭・ニヤ出土カロシュティー文書の和訳——カロシュティー文書に見る西域南道——」及び「楼蘭・ニヤ出土カロシュティー文書について」という2つの大部の論考がある（共に，冨谷　至編著『流沙出土の文字資料——楼蘭・尼雅文書を中心に—』京都大学学術出版会，平成13年，所収)。